

読書と一言でいっても、声に出して読む「誦読（しょうどく）」、声に出さず目だけで読む「黙読」、細部まで注意深く読む「精読」など、様々な方法があります。これらは主に一人で行なう読み方ですが、複数人で行なう方法の一つに「輪読」があります。倫理法人会が推奨する活力朝礼では、テキストとして『職場の教養』（以下『職教』の使用を勧めています。そして、この『職教』は輪読形式で読むことが基本です。毎朝、異なるリーダーが読み始め、段落ごとに読み手が交代し、最後の段落をリーダーが再び読み上げて感想を述べていきます。そして、最後に全員で「今日の心がけ」を斉唱するというスタイルです。

一般的に、輪読というスタイルを経験する機会は多くありませんが、この方法にはいくつかの利点があります。リーダーから「ハイ」と振られた際に率先して読み手になることで、積極性が養われます。また、業務以外で仲間と協力して読み進めることでチームワークが高まり、『職教』の感想に耳を傾けることで、普段は知らない同僚の一面を発見できるなど、様々なメリットがあります。

サービスを営むA社の新入社員Oさんは、学生時代から人前で話すことが苦手でした。毎朝の朝礼では、『職教』や挨拶実習のリーダー役が定期的に回ってきます。当初、Oさんはその役割が回ってくるたびに不安でいっぱいでした。しかし、通常業務だけでなく朝礼のリーダーも立派に務める



働き方に合わせた『職教』活用で オンリーワンの学びを創出しよう

先輩たちの姿を見て、社会人としての姿勢を学ぶ中で「自分も任された役割に積極的に取り組もう」と決意したのです。

リーダーの役割が回ってくると、Oさんは練習を重ね、メモを見なくても自分の思いをしつかり伝えられるよう努めました。こうした姿勢を継続した結果、Oさんは今ではあるセクシヨンの責任者にまで成長し、現在も業務に励んでいます。

その他の活用例として、B社では毎朝の朝礼で『職教』の感想発表はリーダーのみが行ないますが、その他の全職員が今日の感想を記入し、職場に貼り出しています。この取り組みによって、人前では感想が一言二言で終わっていた人の考えを、他の職員がしつかり共有できるようになり、職員間の関係性が向上したそうです。

海外出身のスタッフが多いC社では、本文にルビが振られている『職教』を日本語学習用のテキストとして活用することで、日本語の習得率が向上しているといえます。

また、個人での活用例として、出張の多いDさんは『職教』を常備し、移動中の電車内などで読んでいます。この積み重ねが自身の知識を豊かにし、同僚との会話のネタとしても役立っているそうです。

『職教』の活用方法は、職種や働き方によって千差万別です。しかし、今の自分や自社にとって最良の方法を模索することで、唯一の読み物になるはずです。一人で本を読む秋も素敵ですが、この秋は社員皆で『職教』に親しんでみてはいかがでしょうか。